

# 五虎湯

## (勿誤薬室方函)

**組成** 麻黄 4 杏仁 4 甘草 2 石膏 10 桑白皮 1~3

**主治** 肺熱による喘咳

**効能** 宣瀉肺熱、平喘止咳

### プロフィール

五虎湯は、『万病回春』(1587)には麻杏甘石湯加細茶・桑白皮の形で掲載されている。しかし、これを最初に記載したのは『仁斎直指方』(1264)で、ここでは細茶を入れた麻杏甘石湯を五虎湯と呼んでおり、その後、龔廷賢が『古今医鑑』(1576)に更に桑白皮を加えた五虎湯を記載し、それが『万病回春』に転載され、一般の五虎湯となっていたが、それを、浅田宗伯が細茶を去って改めて「五虎湯」と名づけて用いたものが医療用漢方製剤に踏襲された。『勿誤薬室方函口訣』には「此方は麻杏甘石湯の変方にして喘急を治す。小児に最効あり」と書かれている。五虎湯の5つの虎は、本来は麻黄・杏仁・甘草・石膏・細茶をさしていたものと思われる。

### 方解

五虎湯の基本骨格は麻杏甘石湯で、清肺止咳の麻杏甘石湯に清肺熱・止咳平喘の桑白皮を加えたものである。主薬は麻黄と石膏で、麻黄は平喘に石膏は清肺熱に働く。麻黄の性は温であるが、大量の石膏の存在により処方全体は涼性に傾くため、肺の壅熱を宣肺しながら清泄することができる。杏仁は麻黄を助けて肺の宣発機能を補助すると共に肺気を下降させ、桑白皮は清肺熱・止咳平喘の効によって麻黄、石膏、杏仁の作用を増強する。甘草は諸薬を調和すると同時に中焦を和する。

### 四診上の特徴

本方は、主として喘息や咳嗽に用いられるが、臨床上で麻杏甘石湯との鑑別を述べたものは少なく、四診上の特徴を記載した文献も多くない。秋葉は、舌苔黄、脈は滑数、腹力は中等度と述べている<sup>1)</sup>。喘息発作時に於いては、小青竜湯がゼイゼイとなるのに対し、ヒイヒイとなることが多い<sup>2)</sup>。本方の適応症を検討した細野によれば、腹診で喘息時に心下

痞鞭の様な所見がみられる場合に有効例の49.0%、無効例の23.5%であった<sup>3)</sup>。同様に喜多も、五虎湯で治療した喘息発作の女性で、発作時に心下痞鞭がみられたが、症状が緩解した後は消失したと述べている<sup>4)</sup>。

### 使用上の注意

麻黄が配剤されているので、狭心症や前立腺肥大のある場合には注意を要する。また、間質性肺炎の報告が複数ある<sup>5)6)</sup>。

### 臨床応用

五虎湯は麻杏甘石湯の陰に隠れ、頻用されることのない処方であるが、適応症をつかむことにより使用機会は確実に増えると思われる。諸家の報告では、やはり喘息や咳に関するものが多い。

#### 1. 気管支喘息

本方は古くから気管支喘息に用いられてきたが、『万病回春』に「傷寒の喘急を治す」とあるように、咳を中心とした症状に用いる。日本では小児の喘息の特効薬のように言われるが、小児のみならず成人の感冒や喘息などに用いられている。喘息発作時の頓服薬としても用いることがあるが、痰が切れにくくなることもあり、その際は麻杏甘石湯に変更する<sup>3)</sup>。

細野は、麻杏甘石湯加桑白皮(五虎湯)と小青竜湯加杏仁の喘息に於ける鑑別を述べている。それによると、五虎湯は小青竜湯加杏仁より強い呼吸困難を自覚し、発作の頻度も多く、発作時に発汗を伴っている頻度が高い。一方、小青竜湯加杏仁は足冷、咽喉頭異常感、口渴、水毒症状が多い。よって、五虎湯は喘息発作極期に用いる機会が多く、発作が落ち着いた後に小青竜湯加杏仁を久服すると述べている<sup>3)</sup>。

二宮らは、65歳以上の気管支喘息患者10名に対し、使用中の西洋薬に五虎湯エキスを2週間以上併

用し、症状の変化及びピークフロー値の変化を調べた。その結果、ステロイド剤を内服していた6例では4例で中止、2例で減量が可能であった。また、吸入ステロイド剤の使用頻度も低下した。ピークフロー値の変化は、7例で内服前と比較して改善傾向を示し、3例は不変であった。呼吸困難感や咳、痰などの自覚症状の改善は10例全てで認められた<sup>7)</sup>。

中田は、4歳の男児の喘息発作の治療に五虎湯を用いたところ、喘息発作のみならず夜尿症も改善した1例を報告している<sup>8)</sup>。その他、百日咳様の激しい咳き込みや<sup>9)</sup>、こじれた感冒の咳に用いた報告もみられる<sup>10)11)</sup>。

## 2. アレルギー性鼻炎

嶋崎らは、来院患者を順番に五虎湯群と小青竜湯群に振り分け、どちらの群も1日3回毎食後の服用で花粉症に対する効果を検討した。併用薬として、症状が激しい時のみ点眼薬と点鼻薬の使用を許可した。効果判定は2週間後に行った。両処方とも58例に投与したが、脱落が五虎湯群で10例、小青竜湯群で17例あり、五虎湯群48例、小青竜湯群41例で検討を行い、両群間に性別、年齢、重症度に有意差はなかった。投与結果は改善以上は、くしゃみで五虎湯54.2%、小青竜湯63.4%、鼻汁で五虎湯52.1%、小青竜湯58.5%、鼻閉で五虎湯37.5%、小青竜湯41.5%、目の周囲の痒みで五虎湯35.4%、小青竜湯53.6%、眼脂で五虎湯12.5%、小青竜湯4.8%、眼痛で五虎湯6.3%、小青竜湯4.8%であり、目の周囲の痒み以外両群間に差はなかった。全般改善度は、五虎湯で著明改善39.6%、中等度改善10.4%、軽度改善22.9%であった。小青竜湯では著明改善34.1%、

中等度改善24.4%、軽度改善22.0%であった。不変、悪化を除いた軽度改善以上では、五虎湯72.9%、小青竜湯80.5%であり、両群間に有意差はみられなかった<sup>12)</sup>。

今中らは、アレルギー性鼻炎の患者を鼻水・くしゃみ型に小青竜湯、鼻閉型に越婢加朮湯、両者の混合型、及びどちらかの症状が軽快しない場合や鼻症状に加えて咽頭症状や咳嗽を訴える場合に小青竜湯と五虎湯を合方して投与した。その際、心疾患や胃腸虚弱など麻黄剤の適応がないと考えられた症例は除外している。投与された人数は2007年度16名、2008年度59名、2009年度96名で、有効率は07年度87%、08年度80%、09年66%であった。同時期に投与された小青竜湯単独の有効率はそれぞれ45%、59%、59%であり、併用投与の方がより効果的であった<sup>13)</sup>。

## 3. その他

佐野は、痔疾に対し五虎湯を用いた結果を報告している。それによると、産褥婦8例と妊婦1例、非妊産婦1例の計10例に五虎湯を投与したところ、8例で著効を示した。非妊産婦の1例では、坐薬や内服薬が無効であったが五虎湯内服30分で疼痛が改善したと述べている。これは、麻杏甘石湯で痔疾の痛みが改善することと同様の使い方といえる<sup>14)</sup>。

山本は、拡張型心筋症でうっ血性心不全と頸脈を訴える64歳の男性に、肝鬱脾虚と痰湿化熱の診断で五虎湯と柴胡清肝湯を投与したところ、呼吸困難が改善され脈拍数も安定した1例を報告している。本例では、肺水を治療したことにより心不全が軽快したのではないかと考察している<sup>15)</sup>。

### <引用文献>

- 1) 秋葉哲生 活用自在の処方解説 p194-195, ライフ・サイエンス 東京 2009
- 2) 中田敬吾 勿誤薬室方函口訣解説 漢方医学講座 24 : p45-53, 1983
- 3) 細野八郎 聖光園に於ける気管支喘息の漢方治療 日東医誌 17(2) : p40-51, 1966
- 4) 喜多敏明ほか 五虎湯が奏効した気管支喘息の1例 カレントセラピー 15(4) : p683-685, 1997
- 5) 松井龍吉ほか 五虎湯が誘因となり間質性肺炎を生じたシェーグレン症候群の1例 第29回日本東洋医学会中国四国支部総会講演要旨集 p31, 2000
- 6) 小崎佐恵子ほか 五虎湯によると考えられた薬剤性肺炎の1例 第44回日本呼吸器学会中国四国地方会講演要旨集 p61, 2009
- 7) 二宮裕幸ほか 五虎湯の高齢者気管支喘息に対する効果 日東医誌 47(5) : p148, 1997
- 8) 中田敬吾 麻杏甘石湯加桑白皮が奏効した喘息発作と夜尿症の1例 現代東洋医学(臨増) 8(1) : p276-277, 1987
- 9) 矢数道明 経験4例 漢方と漢薬 8(8) : p772-774, 1941
- 10) 鷺見敦臣 五虎湯の治療経験 漢方診療 11(5) : p11, 1992
- 11) 矢後 修 急性上気道炎、亜急性期の頑固な咳嗽に対する葛根湯加川芎辛夷・五虎湯合方の使用経験 漢方医学 24(6) : p275, 2000
- 12) 嶋崎 譲ほか 春季アレルギー性鼻炎(花粉症)に対する小青竜湯と五虎湯の効果 Ther Res 22(10) : p2385-2391, 2001
- 13) 今中政支ほか スギ花粉症に対する五虎湯と小青竜湯併用の臨床効果 日東医誌 61(supple) : p207, 2010
- 14) 佐野敬夫 痔疾に対する五虎湯エキス剤の使用経験 産婦人科漢方研究のあゆみ XIX : p91-92, 2002
- 15) 山本廣史 難治性心不全に対する五虎湯の効果 現代東洋医学(臨増) 13(1) : p34-39, 1992